【書評】

清水栄子 著
『アカデミック・アドバイジング　その専門性と実践：日本の大学へのアメリカの示唆』
（東信堂，2015 年，本体 2400 円，A5 判，203 頁）

廣内大輔
岐阜大学 教育推進・学生支援機構
学修支援部門

本書は，米国におけるアカデミック・アドバイジングの実態を記した本邦初の文献である。著者（清水栄子氏，現愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室講師）が広島大学大学院教育学研究科に提出した博士論文をさらに充実させたものである。

アカデミック・アドバイジングとは，著者の表現を借りれば，「学生が自身の専攻やキャリアを決定し，進路に沿ったコース・履修選択を行うための支援活動」（はしがき，i 頁）となる。それは，特段悩みを抱えた一部の学生のみを対象とした救済策ではなく，すべての学生が気軽に利用することを前提とした通常の教育活動であるという。

注意を要するのは，「アカデミック・アドバイジング」という語感とは裏腹に，教科の内容に関する具体的な質問に応じるものではないことである。あくまで，入学から卒業までの学業生活全体（これが「アカデミック」に対応している）を見渡しながら，学習計画を立てることへの支援（「アドバイジング」に対応）を指す。

著者の関心を惹きつけた米国流アカデミック・アドバイジングの特色は，それが専門性を有する職業として認知されており，多くの大学では，一定の権限を持った専任アドバイザーによって担われている点である。また，こうした業務を専ら実施する部署が学内に独立して置かれていたり，この職務に従事する者が集う全米規模の専門職団体が存在したりすることも大きい。

6 つの章から成る本書は，アカデミック・アドバイジングの定義から，その歴史，実態，専門性，課題，そして我が国が学ぶべき点までを網羅しており，この職業に関する総合的な理解を目指すものとなっている。その構成は次のとおりである。

序章　本研究の目的と課題
第 1 章　アカデミック・アドバイジングの歴史と展開
第 2 章　アカデミック・アドバイジング制度の現状と課題
　　－ 使命と目的・成果と評価・実践組織と担い手 －

第３章　アカデミック・アドバイジングの現場を訪ねて
　　－ ４大学の組織・担い手・研修 －
第４章　アカデミック・アドバイジングの専門職性とアドバイザーの専門性
終章　　要約と日本への示唆

序章では，米国特有の事情として，他国に先駆けて大学進学率が高まったこと，卒業できる者は全体の約半分であること，こうした状況下で，学生の在籍を維持し経営面での安定をいかに図るかが多くの大学の課題となっていることが示される。

第１章では，アカデミック・アドバイジングの歩みについて，ハーバード大学創立から現在までを４つに区分して分析を加えている。このうち，アカデミック・アドバイジングが確立した時期は第３の区分（1920 年代～1960 年代）である。大学進学率が上昇し，多様な背景を持つ学生が増加したキャンパスにおいてアカデミック・アドバイジングに対する需要が高まった。

第２章は制度面に着目する。アカデミック・アドバイジングの考え方について，この実践家で構成される専門職団体を複数取り上げ，それぞれの方針を比較している。アカデミック・アドバイジングを受けることによって，学生は，自ら情報を集め，勉学上の目標を立て，その実現に向けた計画を練り，履修について判断をし，アドバイザーらと円滑なやりとりをすることが可能になるという。アカデミック・アドバイジングの存在を学生に周知して利用してもらうための施策として，「アドバイジング・シラバス」が存在する話が興味深い。

第３章において著者は渡米し，読者をアカデミック・アドバイジングが実際に行われる現場へといざなう。カリフォルニア大学サンディエゴ校のアール・ウォレン・カレッジ，カリフォルニア大学バークレー校の文理カレッジと化学学科，コロラド大学ボルダー校の電気・コンピュータとエネルギー工学科を訪問したうえでの調査結果と，NACADA（National Academic Advising Association：全国アカデミック・アドバイジング協会）の研修で会ったウェスタン・イリノイ大学のアカデミック・アドバイザーへのインタビュー結果が記録されている。

第４章では，この職業の専門職性とそれを担う者に必要な専門性が明らかにされる。研究手法として，求人サイトに記載された情報を活用した点は独創的であり，その豊かな発想に感心させられる。

終章の面白さは，日本でアカデミック・アドバイジングを導入することを，学内組織の作り方，財源，研修など多方面からシミュレートしている点にある。ちなみに，その場合もっとも大きな課題となるのは，職員数の絶対的な不足であるという。とりわけ，低学年次生を担当するアドバイザーが必要とのこと。アカデミックな面のみならず，学生を一人前の市民に育てるという発想が弱い（少なくとも評者はそう感じている）わが国の大学が，限られた財源でこうした学生支援活動をどのように充実させることが可能かについては，著者と評者を含む読者で一緒に議論したいところである。

今や学問に焦がれて大学の門を叩く若者が少数派であることは，多くの大学関係者が認めざるを得ないところである。だが，この現実およびそれから生じる学習（修）支援へのニーズに対して，大学はどのように対処しているだろうか。

悲しいかな，わが国の高等教育は，すでにユニバーサル段階に突入して大衆化しているにも関わらず，当の大学教員たちの意識は，往時の大学観から完全に脱却・移行できているとは言い難いのが現状である。伝統的に，大学教員の職務は研究と授業の担当，せいぜい一部の管理運営までとされ，現代の学生に必要なきめ細かな支援活動の担い手が不在もしくは不明瞭である。畢竟，そうした仕事を支えるのは「事務」となりがちであるが，では，現行の「事務」が対応可能な範囲はどこまでであり，新たに獲得すべき能力はいかなるものかについては明らかでない。著者の先見性は従来型の，教育職か事務職かといった二項対立に陥りがちなこの現状を喝破すべく，米国という先例に解決策を見出そうとした点にある。

しかし，大衆化時代の学生への支援策を検討しようとしたのであれば，調査対象とした 4 大学の選定は適切であったのかという疑問が出てくる。著者が取り上げた 4 校はいずれも，一定以上の学力を持つ者が多く集う大学であるように思えるからである。もっと学力レベルの低い大学（学習意欲の希薄な学生が集まる大学）や，社会人経験を有する学生の多い大学（非伝統的学生が中心で，学生の学習歴が多様である大学）も扱うべきではなかったか。読了後，強く感じたことである。

また，アカデミック・アドバイジングの議論に入る前に，まずは米国の大学教育とりわけ学士課程教育について，その概要を説く章がぜひとも欲しかった。我々は米国の学士課程について，いつも先例として参考にする割には，知らないことが多いのではないか。例えば米国の大学生のうち，何パーセントの者が転学・編入するのか，メジャーやマイナーとは具体的にどのような概念か，いわゆるリベラルアーツカレッジに行かない学生は何という学部に属しているのか，米国の大学も日本と同様に，学生募集や入試の段階から学部学科という枠が強固なのか，入学した学生は何を頼りに履修する科目を選ぶのか，等々についてである。このような事柄について，序章あるいは第 1 章で紙幅を割いて解説してあればありがたかった。米国の学士課程についての基本的な知識が備わって初めて，「専攻決定」（序章，9 頁，図）といった語がリアリティを持って読者に共有されることだろう。

ところで米国では，日本の部活動・サークル活動やゼミに見られるような，先輩・後輩の関係，つまり上級生が下級生の面倒をみるという学生文化がどの程度存在するのであろうか。評者は常々これらの非公式な制度が，学習（修）支援や学生の社会性の発達に少なからず寄与していると認識しているが，こうした慣習の濃淡と専門職によるアドバイジングの発達は，反比例の関係にあるのではないか。著者には今後この点にもメスを入れていただきたい。

しかし以上の課題を認めたとしても，本書は，ユニバーサル段階に突入した日本の大学が近い将来に対処しなければならない課題を予見して，その克服に必要な専門性を示唆している点で大きな価値を持つものである。本書完成の背後には，大学の事務職員としてキャリアをスタートさせた著者が日々の職務の中で感じた危機感が横たわっている。著者はその問題意識を埋没させることなく，自身がまさにアドバイジングを求め続けることで博士論文の形にまで昇華させた。このことを意識してページをめくれば，本書が，これから専門職として飛躍しようとする大学職員に大きな希望を与える一冊に仕上がっていることも分かる。本書の刊行を心から寿ぎたい。